
幼なじみは勇者様、対する俺は魔王様

テロット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみは勇者様、対する俺は魔王様

【Nコード】

N1636V

【作者名】

テロット

【あらすじ】

闇の国オーリオーツ。その国を治める者を人々は魔王と呼んだ。今の魔王の名はピースレイン・オーリオーツ・キル「ピーちゃん覚悟お!!」 「ちょ、リイちゃん!! 今自己紹介の途中だから後にしてくれ!!」 ……メイ。 ……すみません。やり直していいっすかね…? この物語は魔王、勇者、そして周りにいる仲間達が繰り広げる、方向性なんかかけらも考えていない物語である。

早速だけど幼なじみが来るらしい（前書き）

はい、性懲りもなくまた新しい小説です。

他の小説あるのに何してんの？っていう意見もあると思うんですけど、やりたくなっちゃって！↑

続きは思い付かないのに、新しいものばかり思い付くんですよ。

他にもバカップル異世界にて冒険やら、遺跡に縛り付けられた人間やら。

どうしようもないです。

じゃあ本編へGO！↑

早速だけど幼なじみが来るらしい

やあやあ、皆さん。いきなりで悪いんだが、俺を知らない人も多いと思うので自己紹介をさせていただきたいと思う。

俺の名前はピースレイン・オーリオツ・キルメイ。

今年で23歳。身長は178cmで結構高めであり、太ってはいない。金色の髪を適当に肩辺りで揃えており、容姿については酷くはないと自分では思っている。そう、酷くはない。

「酷くはないよな…。うん…絶対酷くはないよ…」

「ピースレイン様ー？　ぶつぶつと呟き始めてどうされたんですか？　…はっ！　まさか…、ついにおかしく…？」

「おい、ついにとってどういことだコラ」

「ひい…！　痛っ！　痛いですよごめんなさいすいません申し訳ありません！」

このガシツと俺にアイアンクローをくらい、涙目になりながら謝ってくるのは従者のローズ・ローンローズだ。種族というと猫人族。姿形は人間族（俺みたいな）に似ているんだが、違うところが一つだけ。それは猫耳と尻尾がついているということだ。

猫人族について、俺は本などで読んで知っていたんだが、会う前はぶっちゃけ、は？　猫耳ですか？　可愛いもん付ければ何でも可愛くなると思ってんなよ（笑）な勢いであつた。だが実際、ローズに会ったらそんなふざけた考えを持っていた自分を殴り殺したくなりましたっ。

ローズの耳と尻尾は純白の綺麗な毛並みをしている。普通、猫人

族は耳や尻尾を他人に触られることを極端に嫌うのだが、ローズは俺に触られると喜ぶので頭を撫でる時は耳も一緒に撫でるようにしている。そういえば顎を撫でられるのもお気に入りだったな…。本当に猫みたいだ。

と、話が剃れたが、気になる能力はというと、やはり動物の力がプラスされているためか身体能力は高い。しなやかな肉体は、力はないものの柔軟性、速さに秀でており、それを持って相手を翻弄していく。決定打がないのが弱点といえば弱点と言えるだろう。

よし、次はローズの容姿について説明しようか。

肩甲骨辺りまで流している髪の毛はやはり純白。同じように肌も白く、爛々と輝く赤い眼がよく映える。すらりとした手足、小振りながらも形のいい胸、キュツと括れた腰、足に向かって素晴らしいラインを描いているお尻と、身体も抜群のプロポーションをしている。ローズさん、マジハンパないっす。美少女という言葉はあなたの為に生まれたじゃないでしょうか？

なんて冗談は置いておき、続きを。従者であるのにさっきはあんな事を言っていたが、然るべき時には俺をちゃんと立ててくれる出来たやつであるため、不満などない。むしろ俺なんかには忠誠を捧げてくれたことに感謝したいくらいだ。

あ、そうそう。言い忘れていたが俺、魔王です。従者とかも納得？

「つたく。お前はもう少し口を慎め。こんなんでもお前の主なんだからよ」

そう、主なんだ。なのに、ついにおかしく…？　だなんてこの従者はほざきやがったわけで、俺でさえ主従関係を疑ってしまう。内心では俺を馬鹿にしてるんだろう。泣くぞ。

「ううー…。だとしてもアイアンクローはやり過ぎだと思うのです
が…」

「……………はぁ…。悪かったよ。ごめんごめん」

涙目になって訴えてくるローズを見て、流石にやりすぎたと思いローズの頭を撫でる。と、目を細めて気持ち良さそうに頭を掌に押し付けてきた。その、もっとおくとでもいうように甘えてくる姿はとても可愛らしく、自然に頬が緩む。そしてゴロゴロ言いはじめた為、顎を撫でるも追加。

「うにゃーん♪ピースレイン様あゝ…」

膝の上に乗ろうとしてきたローズを迎え入れ、頭やらお腹やらを撫でてやっていると、その場にピピピと電子音が鳴り響いた。

と、ここで「その場って何処だよ？」という疑問にお答えしよう。え？ 聞いてない？ うるさい。

今俺がいる場所、いや国は、大陸の最南端に位置する闇の国オリオーツ。人族ではない者たちが住む場所であり、その広さは大陸の三分の一を占める程である。魔王である俺が統治する国だ。そこにある魔王城の謁見の間にて、玉座に座っている。

そんなことより、この椅子の坐り心地は凄まじい。座れば程よく身体を包み込み、何の負担もかからない。もう天国か？というような感じだ。装飾は赤と黒で施され、デザインもなかなかである。実に俺好み。この椅子を作ったやつはきっと後世に名を残せるだろう。つか俺が残してやる。名前知らないけど。

おお、また話がズレたな。気になっている今の電子音はというと…。

「あ、メールだ」

そう、メールだ。俺の世界ではケイタイなるものがあり、それは

遠く離れた者同士で魔法を使わなくとも話せたり、手紙を送ることのできる優れものである。ケイタイは誰が発明したか。それは広い大陸にある国の一つが発明したのだが、今は割愛させていただこう。正直今は関係ない。

「メールですか？ 誰からでしょうねえ？ ……んっ……にゃふふ♪」

甘えるような声で聞いてきたローズの質問に答えようと、メールの受信ボックスを開く。そこには見覚えのある名前があった。

「お、リイちゃんからだ」

「……………またその女ですか？ 用件は何て？」

「そう邪険にするなって。機嫌直せよ、よーしよしよし」

「…んうっ……………あふ……………♪」

ムツゴ○ウさんばりに撫でまくり、ローズの機嫌を取りつつメールを確認してみると。

『From…

リイちゃん

件名…

大好きなピーちゃんへ♪

本文…

ピーちゃんヤッホー！！元気にしてた？私はすっごい元気だよー

(^O^)/

それはそうと、近々そっちに遊びに行くね？

前遊び行った時も負けちゃったけど、今度は負けないよー？勝ってピーちゃんのお嫁さんにしてみたらうからね！？

あれから新しい魔法も覚えたんだよ？すごいでしょー？褒めて褒めて♪

んじゃあそういう訳だから準備しといてね？

バイバーイ(^O^)/シ

』

……………うん、いつものリイちゃんだ。相変わらず嵐のようなやつだな。

リイちゃんとは俺の幼なじみである、リイナーゼ・メルベルンのことだ。同じ村で生まれ、隣同士の家に住み、大体二人でいたため、近所の人達にはセットで覚えられていた。だから一人でいると驚かれたほどである。そんな俺達だったが当然別れは来るもので、きっかけはリイちゃんが魔物に襲われたこと。ある日森で迷子になったリイちゃんを探していたら、悲鳴が聞こえた為その場へ急行。そしてたらなんと、リイちゃんが狼型の魔物に襲われているではないか。リイちゃんを守ろうと必死だった俺は、戦闘の途中で自分の中にある枷が外れたような感覚を覚えた。それが魔力の解放であり、魔物がビビって逃げてしまうほどに強大だったらしい。それから、俺に先代魔王を軽く上回る強大な魔力があると知ったオーリオーツが、俺を村まで迎えに来た。オーリオーツの王、魔王は一番の強者がなるものであるとされているため、強い魔力を持つ俺に白羽の矢が立ったわけだ。一応俺の意思も聞いてくれたのだが、あれはもうすでに決まっているようなものだったな。顔は笑ってるが目は全く笑っていない大人達が子供を囲み、意思を聞く。いいえとはとても言えない雰囲気であり、まだ12歳であった俺には少々堪えた。半泣き状

態で頷いたのは懐かしい記憶だ。忌ま忌ましくもあるがな。何せトラウマものだったし。

というか丸つきり話が変わるのだが、もうお互い20歳越えたつていうのに、今だに相手をちゃん付けて呼ぶのは流石におかしくないか？ もう大人だというのにちゃん付けは少し……。まあそれは今度リイちゃんにも言ってみるか。改善してもらおう。

それじゃありイちゃんが来る事は皆にも伝えとかないといけないな。あいつが来ると、決まって城が半壊するから……。心の準備を、ということだ。あ、あと本文中にあったお嫁さんのくだりはスルーしてくれ。いつもの事だから。

「ローズ、今から皆をここに呼ぶ。そろそろ降りてくれないか？」

「え？ 何故です？」

「いやー……近々あいつが来るらしくて……」

「……なるほど」

あいつが来ると言っただけで全てを分かってくれる出来た従者。ローズの頭にもあの惨劇が刻み込まれているだけあって納得してくれた。…にしても本当に残念そうに膝から降りるな、ローズは。

「それより、ピースレイン様。またあの女は嫁だ何だとほざいていたので？」

「ああ、今回も書いてあったな」

「……あの女は……。ピースレイン様のお傍には私だけで充分だつていうのに……」

すごい恐い形相で呟いているローズの今の姿は、どす黒いオーラが出ているように見えるほどに恐い。今のローズの近くにはいたくないな…。俺にそう思わせるくらいだから、他の人にとっては相当なものだろう。だって般若が見えるよ？ 取って食われそうだよ？

「にしても、あいつも嫁だとか言ってからかわないで欲しいな…」

「…………でもこの方はいつまでたっても鈍感。私も、気に入らないけどあの女もこれ程までにお慕いしているっていうのに…。報われないなあ…。はあ……………」

今度は寂しそうな顔で呟き始めた。鈍感とか報われないとか言っているがまるで意味がわからない。それにしても、ローズをここまです落ち込ませるなんて許せん。誰かのせいだったら俺の魔力を極限まで込めた神話級魔法ぶっ放してやる。…あ、ダメだ。国が半分吹き飛ぶな。

つか、そろそろ皆を呼ばないとまずいか。

「さて、じゃあメールを一斉送信で…」

玉座の間に集合、っと。

（20分後）

「さて、皆集まってくれたか？」

玉座の間に集まったこの国の重鎮達を見る。すると俺の横に立っていたローズが俺に耳打ちをしてきた。その顔からは何と言うか、呆れの色が見て取れたため、ある程度の予想は出来たが一応耳を傾ける。

「失礼します。ピースレイン様、ウルツがまだ来ておりません」

「またあいつか……。あいつはケイタイ音痴だから……」

「苦手意識からか触ろうともしませんしね……」

ウルツ。フルネームはウルツ・ウィルムーン。人狼族の青年である。人狼族も人族とあまり変わらない。ただ人族よりも身体能力に優れ、五感も遥かに鋭い。あと決定的に違うのが、満月の夜に二足歩行する狼へと変身することである。変身すると人間時を圧倒する身体能力、特に速さに関しては他の追隨を許さない。

と、能力は実にハイスペックなのだが、ウルツはなんと容姿の方もハイスペックなのである。

「すいまつせーん！！ 遅れましたー！！」

……。今、調度入ってきたため説明しよう。後ろで結われた銀色の綺麗な長い髪に、よく鍛え上げられた身体とギラギラと輝く黒い眼が引き立てる精悍な顔は、世の中の女達を虜にしようのではないかというほどに魅力に溢れている。とても妬ましい。それで、この国では魔王親衛隊隊長という地位にも就いている為、実にモチることだろう。もう本当に妬ましい。

「あの……主？　すごい怖い顔をしていらっしやるのですが……」

「ん？ ああ、すまん。お前は本当にモテるだろうなと思ったら、
つい、な？」

「ええー………」

いや、それはお前が悪い。モテるということは女性に好かれると同時に、男からの嫉妬に身を焼かれるということだ。そこは覚悟し
とけ。

「ピースレイン様。私は貴方様の方が魅力的だと思いますよ」

そんな事を言われ横を見れば、ローズが柔らかに微笑んでいた。
一瞬見惚れてしまうほどの暖かい笑顔、思わず頬に触れたいと手が
動いてしまうほど。

「ん、ありがとうローズ。世辞でも嬉しいよ」

「………お世辞なんかじゃないのに……」

ローズが何か呟いているのだが、よく聞こえないため聞くのを断
念。そして話を進めようとウルツの方に向き直る。

「で？ 一応聞くが、遅れたのはやっぱりケイタイが満足に扱えな
いからか？」

「は「あー、いいうるさい」おい聞けよおお！！ 聞いたの主じゃ
ないっすか！！ なら、はいぐらい言わせろよおお！！」

今までのやり取りで分かったと思うが、ウルツはギャグ要員だ。

さて、あいつはまだ何か叫んでいるがそろそろ本題に入らないといけない為あえて無視させてもらうか。俺は表情を真剣なものに変えて、今一度皆を見渡す。……………こう見ると女性の数も多い方だな。って、違うぞ。本題に入れ、俺。

「皆、よく集まってくれた。急に呼び出してすまなかったな」

そう言って頭を下げる。今はそうでもないが、始めの頃はとても驚かれた。魔王という存在が頭を下げるなど前代未聞なことらしく、うろたえたのを今でも覚えている。あの時は俺もうろたえてしまったな…、うん。

「今日集まってもらったのは一つ、知らせがあるからだ」

「知らせ…ですか？ 私達全員を集めるとは、そこまで大変なことなのでしょうか？」

文官の一人が言う。財務を仕切ってもらっているエリナ・トリスというエルフ族の女性だ。

エルフという種族は、総じて魔法の能力が高い。近接戦闘は大体からつきしであるが、後方からの攻撃を任せれば期待以上の働きをしてくれる。それ以外には理解力がずば抜けていることが挙げられる。エルフは賢いのだ。いや、別に他の種族がアホだとは言っていないが、やはり比べると頭一つ抜きん出ているからな。

エリナの容姿についてだが、切れ長の眼、瑞瑞しい唇、通った鼻筋、尖った耳、それらが神懸かっているといったいいほどバランスよく配置されている。そして眼鏡をかけているのでインテリ美人といった感じだ。スタイルは抜群。あの兵器としか思えない大きい胸はどれだけの男を魅了したのか。きつとすれ違う男の数だけだろう。なんともまあ……………、けしからん、実にけしからんぞ。だが俺は胸

よりも触り心地のいい髪が気に入っている。何度か頭を撫でたが癖になりそうなほど気持ち良かった。指をすり抜けていく艶のある新緑色の髪はやばい。頬を染めるエリナが可愛かったのも気に入っている理由の一つであるが。でもその度にローズが睨みつけてくるのは何でだろうな…？ その髪が最高なエリナの質問に答えるため、より一層顔を真剣なものにする。

「ああ…。心して聞いてくれ」

どこからかゴクリと唾を飲む音が聞こえてきた。そして俺は口を開く。

「近い内に、この魔王城に勇者がやってくる」

……………一番最初に悲鳴を上げたのは誰だったか。

勇者をしている幼なじみが遊びに来た（前書き）

どうもー、第2話です。

ちよいと長めで、読みにくいかもしれませんが我慢してください↑

勇者をしている幼なじみが遊びに来た

「ピーイーちゃん！ あーそびーましょー！！」

我が幼なじみの声が聞こえてきた。

皆に勇者こと幼なじみが来ることを知らせてから2週間。流石にここまで来るには2週間という時間がかかったらしい。そして、毎日毎日旅先の状況を知らせてくるメールが来た。「今日の晩御飯はねー…。じゃーん！お肉ーっ☆おいしいー！ピーちゃんは何食べた？」とか「もうすぐ着くよ！あとはヒエル霊峰越えるだけっ。早く会いたーい！！」やら。そんな一々報告しなくても…とは思ったが、2週間は俺達にとつてとてもありがたいものだった。魔王城全体に、気休めとはいえ結界を張り、強度を高めていたからだ。魔王である俺まで携わったのだからそこまで酷くなることはないだろうと、信じている。

「ついに来てしまいましたね…」

「ああ…」

「「ハア…」」

俺とローズが同時にため息を吐く。普段なら行動がかぶると、「ひゃっほー！ やっぱり俺とローズは相性抜群だな！」とテンションが上がって抱きしめるところだが、今はとてもそんなこと思えない。もうすぐ遊びという決闘、いや死闘が始まるのだから…。

「確かに久しぶりにリィちゃんに会えるのは嬉しいけど…、戦いたくねえ…」

昔から、魔王と勇者は戦う運命にある。それは分かる。分かるんだが…、何故よりによってリィちゃんが勇者になるんだ…。勇者というのは笑顔爽やか万能ハーレム野郎がなると相場が決まっているだろう。それにリィちゃんは魔王と幼なじみなんだぞ。あの国は狂ってるな。

「憂鬱だ…。リィちゃん相手に本気出せるわけがないのに…。…………はっ！ まさかそれが狙いかっ！ 汚い奴らめえ……！！」

「そのわりに毎回毎回、最後の方は目がマジになっておりますけど？」

「…………否定はしない」

俺は戦闘狂の気があるから、やってるうちにどんどん楽しくなっていくってしまう。だから最後は本気出しちゃって終わり、みたいな感じで決闘の幕は下りる。十分リィちゃんも強いんだけどさ、やっぱり俺の方が魔力とかも多いし強い。負ける度に肩を落とすリィちゃんを見ると何と言うか…、忍びない。

「まあまあ主。相手も勇者なんだ」「ピーちゃん！！」喋らせろよっ！！ 前回に引き続き、まともに喋ってねえぞ俺！！」

ウルツはうるせえなー。いっつもいっつも叫びやがって…。そんなに叫びたいなら外行って叫んでこいや。
と、それよりも。

「久しぶりだねっ!!」

「おう、久しぶり」

入ってきた幼なじみの相手をしないとな。

手を振ると、それに気付いたリイちゃんは嬉しそうに大きく振り返ってくる。誰かの見送りでもしているんじゃないかと思うぐらいブンブンと振り回す様は、とても俺と同じ年には見えない。そんな振んなくても見えてるよ…。

空をそのまま切り取ったような綺麗な青い髪を後ろで束ねた美女。それがリイちゃんこと、リイナーゼ・メルベルンだ。艶のある青い髪は昔っからさらさらっで、気付けば撫でていたことが何度あることか。指で梳くと抵抗なくすり抜ける触り心地もいいのだが、こいつの髪は、何故か温かい気がするのだ。それといい匂いもする。撫でるのを止めるのに苦労したが、リイちゃんは喜んでたしいとしておく。

そして容姿。大きな意思の強そうな眼は髪と同じく青、こっちは深い海のような青だ。あとは健康的な白い肌に、銀色に輝く鎧の上からでも分かる抜群のプロポーション。鎧が胸元や肩、へそに太ももなどが見えるぐらいに露出度が高いため分かるのだが…。鎧に魔法がかかっている感じがするから、ちゃんと身は守れるんだろうけど、あそこまで出す必要なくね？ あれ鎧じゃねーよ。もう踊り子の衣装並だよ。道行く人々、特に男共、の視線は釘付けになることだろう。

「ちっ…」

「ピースレイン様？ 何故舌打ちを？」

「あ、いや…。あの鎧はさぞかし男のいやらしい視線を独占するだろうな、と」

全く…。あー、イライラする。俺の幼なじみに色目使いやがったただじゃおかねえ。神話級魔法ぶち込んでやる…。

「ピースレイン様…、それは嫉妬ってやつじゃ…。ハア…いいなあ…」

「ん？ 何がいいんだ？」

「いえ、何でもありません…」

「…？」

急にローズが落ち込みはじめた。本人は何でもないって言って教えてくれない。俺も万能じゃないのだからこの様子だけじゃわかるわけがないのだが…。ここは諦めた方が良さそうだな。

「ローズがいいならいいけど、あんま無理すんなよ。お前の笑顔が見れないのは悲しい」

「…ッ！！」

ローズをとりあえず元氣付けようと声をかけたら、今度は顔を真っ赤にし、もじもじしはじめた。それを見て、どうしたんだ？と首を傾げる。というか忙しいやつだな…。

「主の鈍感な凄まじいですね…」

「…………ウルツ。爪剥がすぞ」

「地味っ!!」

「何？ 飛び散る系のがいいのか？ 知らなかった…」

「嫌に決まってるだろ！？ 何だよ飛び散る系って!!」

「一々大声で突っ込むな、うるさい…。お前はもう少しバリエーションを増やせ」

「ぐ…、くうう…」

勝った。これはもう文句なしの勝利だろう。お前は床で悔しがってるといい。

「さて、待たせて悪かったな」

「ううん、平気。いつものことだからね」

「…すまん」

「だから大丈夫だよー」

ニコニコと笑いながらリィちゃんは許してくれた。こんなやり取りもいつものこと。前は半年前だったか。久しぶりだな。

「他の奴らはどうした？」

「多分もう少しで来るよ」

するとどたどたとこちらへ近づいて来る足音が聞こえた。リイちゃんまた置いてきたのか。あいつらも大変だな…、と心の中で合掌していると、ついに扉が開かれ三人の人間が入ってきた。

「リイナーゼ殿！！ あれ程先行するなど言っただろう！！」

一番最初に入ってきたのは見た目麗しい騎士風の女。名前は、ミーシャ・バルトー。リイちゃんが勇者やってる王国の貴族だった気がする。建国から代々優秀な騎士を輩出してきた由緒正しき家らしく、その身に誓った騎士道は気高く、美しい。優れた剣技に、勇気、誠実さ、高潔さ、礼節。どれもが見えていて惚れ惚れするほど。だが実際にはまだ心から仕えたいと思えた者はいないらしく、勇者であるリイちゃんに付いていくことで探している途中のようだ。

さて気になる容姿だが、こちらもまた美しい。ブロンドの長い髪はふわふわとしており、また青い眼も優しげなため、顔の作りは凛々しいのだが全体的に優しい印象を受ける。また体つきも素晴らしいが、リイちゃんの鎧とは違い、しっかりとしたもののため肌の露出は少ない。…別に残念だなんて思っていない。チラリズムも大切な要素だからな。

ミーシャは今は全速力で追ってきたために息を少し切らしているところだ。そしてその後ろから、遅れて二人の男女が顔を覗かせる。二人の容姿は髪の長さや眼以外はそっくりで、双子というのが分かる。兄がヨハン・ペネティブで、妹がアリア・ペネティブだ。燃えるような赤毛で性格も暑苦しいのかと思いきや、思った通り兄は一々俺に突っ掛かってきて暑苦しい。妹は普段は温厚で、リイちゃんやミーシャと比べると少し地味めである。のだが…、この二人がまた厄介で、戦闘になると高笑いしながら魔法をぶっ放す魔法版トリガーハッピーになってしまう…。こいつらは怖い…。勇者に付い

ていくぐらいだから魔法はほとんど使えるため、上級魔法や最上級魔法がタイムラグなしで次々と飛んでくる。また質が悪いのが魔力切れになるまでその状態であるということだ。魔力切れ時の安らかな寝顔といったら、本当にムカつく。だから最近魔法打つ前に俺が気絶させるか、リィちゃんかミーシャにしてもらっている。向こうも申し訳ないと思っていられない。助かります…。

容姿は短い髪で茶色の吊り眼がヨハン、長い髪で茶色の少し垂れ眼がアリアだ。二人とも中性的な顔立ちをしている。ヨハンは引き締まった体つきで、アリアはスレンダーながらも女の子らしい体つきだ。

これで勇者御一行が揃ったわけだ。…うん、なんというパーティー。話すぶんにはいいが、俺は絶対入りたくない。特にあの双子とは絶対旅はしたくない。

「もう、リィナーゼ様。一人で行かないでくださいよ！」

「そうだぜ。追いかける俺らの身にもなってくれよ…」

アリアとヨハンがリィちゃんに抗議する。横ではミーシャが腕を組み、うんうんと頷いている。

「あはは…、ごめんよ皆ー。早くピーちゃんに会いたくて」

苦笑いで頬をかきながら嬉しいことを言ってくれる。と、そこで初めて気が付いたのか全員がこちらを向いた。

「ああ、すまないな、ピースレイン殿。息災であつたか？」

「あ、すみません！ 改めて、こんにちは、ピースレイン様！」

「よう、魔王。早くその首よこせ」

「こんにちは、アリア。そして俺は元気だったぞ、ありがとう。ミ
ーシャ殿はどうだった？クソガキはくたばれ」

「ああ、私も息災であった。お心遣い感謝する。ローズ殿とウルツ
殿はどうであった？」

「はい、私も元気でした。ありがとうございます」

「おう、俺もだ」

何だとコラ！ と暴れるヨハンを押さえながら、ニツコリと笑い
挨拶してくれるミーシャとアリア。魔王と勇者パーティーとは思え
ないやり取りなのだが、最初はもちろん殺伐としていた。だが、俺
とリィちゃんの会話を聞いて警戒がどんどん解けていき、今では友
人のような感じになったのだ。だがクソガキ、お前は違う。お前だ
けは俺の敵だ。

「…で、やっぱり戦うのか？」

「勿論だよ！ そのために新しい魔法も覚えたんだから！」

「んゝ…」

「ピースレイン様、もう諦めた方がよろしいかと」

「……………はあ…。だな」

俺は座っていた玉座から立ち、リィちゃん達を見下ろす。こっか

らは幼なじみ同士じゃなくて、魔王と勇者だ。覚悟を決めないとな。

「分かった。勇者よ、戦おうではないか。この魔王、ピースレイン・オーリオーツ・キルメイが相手しよう」

「ありがとう！ それじゃあこっちは勇者、リイナーゼ・メルベルンと…」

「騎士、ミーシャ・バルトーがお相手させて貰おう」

リイちゃんもこの時ばかりは表情を引き締め、腰に差していた剣を抜き、ミーシャも同時に剣を抜き構える。二人の構えた姿は絵画にありそうなほどに美しい。題名は美しき英雄とかだらうな。

「ちよっ、あれ？ 俺らは？」

「ごめんねー。アリアちゃん達は今回もお休みで…」

「酷いですよ！ 仲間外れなんて！」

「そうだぜー！！ 俺もあいつに魔法ぶち込んで…っ！！」

途中でヨハンの声が途切れたため、驚いた様子のアリアがそちらを向くと、そこには倒れたいくヨハンと手刀を入れたミーシャがいた。そして何かを考える暇もなく、アリアの首筋にもリイちゃんが手刀をいれ気絶させる。うわ…、容赦ねー。

「すまないな、ヨハン、アリア。…さあ、これで準備が整った。ピースレイン殿、始めようか」

「…………ああ、そうしようか。ちょっと待ってくれ」

俺も準備をしようとしゃがんで床に手をつく。そして呪文を唱えた。

「『来たれ契約の剣』」

唱えたものは召喚魔法。自分と契約をした物であったり、生き物であったりを召喚する魔法だ。

床に直径30cm程の複雑な魔法陣が描かれる。そうして光りはじめた魔法陣からゆっくりと手を上げて行くと、剣の柄が出てきたため掴み、勢いよく引き抜く。

俺が手に握るのは柄から刃まで真っ黒の大剣だ。名はアブソリュート。魔剣と呼ばれる代物だが、大層な能力などない。ただ絶対に”折れない”し、切れ味が”落ちない”というだけだ。

「よし、いいぜ。かかってきな」

「あの、ピースレイン様。私たちは如何いたしましょうか？」

「ん？ お前らは下がって見とけ」

「「はっ」」

二人同時に跪つき、後ろに下がる。うん、いい従者たちだ。あとでローズにはケーキを上げよう。ショートケーキが好きなんだよな。可愛い。ウルツは…、酒でいっか。

「よし、開戦だ！！」

俺が叫ぶと同時に俺に向かって来る二人。魔法で身体強化を使っ

ているため速いが、反応は余裕に出来る。

「はあああ！！！」

「ふっ！！！」

リイちゃんは頭を、ミーシャは足元を狙ってくる。拔群のコンビネーションで放たれた最初の一撃は、地面に真っ直ぐ刺さったアブソリュートに止められた。先ず剣技ではリイちゃんより上のミーシャを蹴りで吹き飛ばし、リイちゃんから相手をする。ミーシャは剣で防御をするが、かなりの距離を吹き飛ばされたと思う。最後まで確認はせず、蹴りながら抜いたアブソリュートを真上からリイちゃんにたたき付けるが、横に避けられる。続けて蹴りも放つがそれも避けられ、リイちゃんは後退しようとするがそうはいかん。接近戦が不利だから下がるのはいいが、そうさせるわけねえだろ！！

「私を忘れて貰っては困るっ！！！」

追おうとしたところでミーシャが切り掛かってきたため、仕方なく追うのは断念。ミーシャに対応する。切り下ろしをアブソリュートで受け止める。

「ちっ、もうちょっと休んでくれ、よっ！」

「そももいかんっ！！！」

切り下ろしから横薙ぎに繋げ、切り上げる。それを受け止め、避ける。隙を見つけ攻撃に出るが、中々当たらない。と、ここでリイちゃんが呪文を唱えていることに気付いた。

「あ、まずっ！！」

「『浄化の光を宿し天使の羽に 貫かれ滅せよ』 ミーシャどいて！！」

「ああ！」

「あれ最上級魔法じゃねえか！？」

まずい、早く防御魔法を！

「『フェザー・レイ』！！」

「『闇衣』！！」

瞬間、数百万、数千万の視界を覆うほどの輝く羽が飛んでくる。

そして俺の身体も闇が包んでいく。上級魔法だが、詠唱を破棄したため効果は落ちる。なるべく当たらないようにしないと。

『フェザー・レイ』は威力ではなく、数重視の魔法である。だからアブソリュートで身を隠して守っているわけだが、俺が身動きが出来ない今のうちに次の魔法を唱えていることだろう。つか、城大丈夫かなあ…。

「…突っ込むしかないか？」

そうと決まれば実行だ。アブソリュートを盾にしながらリイちゃん達の気配があるほうに走る。羽の雨の中を突っ切る途中、雨が止んだ。もしかして、次の魔法が完成したかつ！？

「『神々をも焼き尽くす裁きの炎 全てを無に帰し 己が罪に気付

け 汝は罪深き者なり』」

「ば、ばか！！ それ神話級魔法だろ！！ 新しく覚えたってそれ
かつ！！」

冗談じゃない！！ あんな魔法唱えられたら魔王城なんか一瞬
で崩れちまう！！ 俺も神話級魔法を…。

「『喰らうは力 壊すは心 通る道に存在は許さず 通った道には
何も残らず ただ喰らい壊すだけ』」

「『ラグナロク』」

「『エンドレス』」

リィちゃんの周りから白い炎が噴き出す。それらが意思を持った
かのように俺に向かってくる。どれくらい熱いかなんて分からない、
分かる必要もない。ただ分かるのは、触れれば跡形もなく燃やし尽
くされるということだけ。だが俺も神話級魔法で迎え撃つ。周りか
ら黒い靄が出てきて白い炎を”喰らう”。『エンドレス』は全てを
喰らい尽くす魔法だ。相手も同じ神話級で、込めた魔力も同じなら
無理かもしれないが、俺はかなりの量の魔力を込めた。喰らえない
訳がない。白い炎を喰らい尽くし、俺は魔法を消す。危険な魔法だ
からな、下手したら仲間まで喰われちまう。

「ええ！？　ラグナロクが消えた！！」

「これは驚いたな…。まさか神話級の魔法が全く効かないなんて…」

リイちゃんとミーシャは目を見開き、この事に驚いている。この一撃に賭けてたんだと分かる分、なんか申し訳ないな…。

「あ…」

するとリイちゃんが力が抜けたように倒れる。ミーシャが抱き留めるが、どうやらこれ以上動けないらしい。

「ごめ…、魔力切れみたい…。あはは…」

「だろうな。神話級なんか単独で使えるやつお前以外に見たことねえ。大したもんだ」

「えへへ…」

俺が褒めてやるとリイちゃんは力無く微笑み、眠ってしまった。本当に大したもんだ。神話級とは神話の中で神が使った魔法とまで言われるものだ。それこそ天災、いや、それ以上だろう。それを人の身で使ったこいつは、間違いなく勇者だ。

「ミーシャ殿、どうする？　まだやるか？」

そう問いかけるとミーシャは首を横に振る。

「いや、やめておく。一人では勝てる気がしない」

「そうか、良かったよ。俺は疲れた…」

「ははは。相変わらずだなピースレイン殿は」

優しく微笑むミーシャに癒されつつ、アブソリュートを帰す。すると後ろからローズとウルツが近付いてきた。

「お疲れ様でした。タオルです」

「気が利くな。ありがとう」

受けとったタオルで汗を拭く。いかん、風呂に入りたくなってきたな…。

「お風呂は沸かしておりますから、後でゆっくり浸かって来て下さいませ」

…流石過ぎるなローズのやつは。

「……………一緒に入るか？」

「ふえ！？ いけませんいけません！ そんな、私なんかが一緒になどっ…！」

「はは、冗談だ」

「え？ ……………むう…」

頬を膨らますローズも可愛いな…。よし、からかったし頭を撫でてやろう。

「主、その…、客人たちはどういたしましょうか？」

頭を撫でて、機嫌が良くなってきたため喉に移行しようとしたところでウルツが声をかけてきた。ダメだ、夢中になってた…。

「あ、すまん。ミーシャ殿、部屋と風呂を用意させよう。リィちゃんが生きたら一緒に入ってきてくれ」

「すまない、感謝する。私も汗が気になってな。殿方の前では失礼だろう」

「いやいや、そんな気にしなくても。他に不自由があれば言ってくれ。出来るだけのことはする。…じゃあウルツ、アリアとクソガキも連れて部屋へ案内して差し上げろ」

「はっ」

ウルツはアリアを背負い、クソガキを脇に抱えて、ミーシャを伴い出て行った。つか、まだ気絶してたのか…。

「多分、何日かいるんだろうな…。波乱の予感…」

「その割に楽しそうですね」

「ん、まあな。友達といて楽しくない訳ないだろう？」

「ふふ、そうですね」

今回はあいつら、どれくらいここにいるのやら。前は一ヶ月ぐら

いだったか。はは、しばらくの間楽しい毎日が続きそうだ。

「…さて、風呂にでも入るか」

勇者をしている幼なじみが遊びに来た（後書き）

魔法について

難易度は高い方から

神話級魔法

←

最上級魔法

←

上級魔法

←

中級

←

初級魔法

となっている。

難易度が高くなるにつれ、大量の魔力量と扱うだけのセンスが必要となってくる。センスがあっても魔力がなきゃダメ。魔力があってもセンスがなきゃ話にならない。

魔法を唱えるには詠唱が必要。詠唱破棄や無詠唱なる技術もあるが、威力は格段に下がる。

属性は火、水、土、風、雷、光、闇、無の8種類が確認されている。召喚魔法は無属性に含まれる。

後々追記していく。

友人達との久しぶりの会話（前書き）

えー、続きです。

楽しんで頂ければ嬉しいです。

また他の話が書きたくなりました（オイ

友人達との久しぶりの会話

突然だが、勇者とは如何なる存在なのだろうか。人によって答えは変わってくるだろう。それは勇気ある者であったり、それは魔王を打ち倒す者であったり。そして魔王である俺の答えは、勇者とは皆に希望を与える者である、だ。とまあ、こんな問答が今本当に話したいことなどではないため本題に入る。それは俺とリィちゃんとの関係だ。幼なじみではあるが、仮にも魔王と勇者。このままいつまでも、敵であるが親しいなどという曖昧な関係が続けていいはずがないのだ。これが冒険者や傭兵という地位のついてこない立場（ランクの上の者なら別だ）なら問題ないのかもしれないが、俺は今や一国の王だ。敵と親しい王など国民に不安を与えかねない。それらのことを考えるとやはりこの現状は好ましくない。しかし俺も、たった一人しかいない幼なじみなのだから会えないなんてことにはしたくない。そもそも何で俺を殺さなきゃいけないんだ。魔王とは言われているものの、他の国に害を与えたことなどないのに。大方このオーリオツの広大な土地が欲しいだけなのだろう。迷惑な話だ。いっそ滅ぼしてやろうかな…。

…すまん。話は戻り、何らかの改善策を設けねばならないのだが、さて、どうしたものかね。誰か良い案を持っていないだろうか。

「ピースレイン様、皆様がもうすぐお見えになるそうです」

おっと、どうやら長い間考えこんでいたようだ。ローズに声をかけられなければまだしばらく考えてただろうな。

「ああ、わかった。ありがとう」

ローズに礼を言ってから、最終確認としてもう一度辺りを見渡す。

ここは中庭に生えている大きな木の木陰だ。そこには丸テーブルと椅子が置いてある。俺が友人たちと茶を飲むただけに作らせたスペースだ。地面は芝生で、周りには色とりどりの花が咲き誇り、自分の美しさを見せ付けている。離れた場所には噴水もある。花の匂い、飛んでいる蝶や鳥の囀り、噴水から出る水の輝き、吹き抜ける暖かい風。この場は五感を心地好く刺激してくれる、俺のお気に入りの場所だ。そんな場所で友人と茶が飲めるなんて最高だろう。と、ここで後ろから馴染みのある気配が近寄ってきた。そしてそのお仲間達の気配も。迎えようと後ろを向こうとしたが、瞬間、目の前が暗くなった。

「だーれだ？」

クスクス笑いながら、目を手で覆った犯人が問い掛けてくる。そんなの分からないはずがないだろうに…。

「リイちゃんだろ？」

「おおー！！ 正解だよ、ピーちゃん！！ よく分かったねえ？」

「俺がお前のことを分からない筈がないだろ？」

「そ、そっか…。…えへへ。私もピーちゃんのことは何でも分かるよ？」

「ああ、知ってるよ」

頬を若干赤くし、はにかみながらリイちゃんは言った。何でも知ってる、か…。そんな存在に巡り会えるということは本当に幸せなことなんだろう。

「さあ皆、遠慮なく座ってくれ」

そう言うときソガキ以外が礼を言って座っていく。俺の右にリイちゃんが座り、ミーシャが左に座る。アリアはリイちゃんの隣に、ヨハンはミーシャの隣だ。皆その場所に当然のように座っていく。前来たのは半年前だったがよく覚えてるな。ちなみにローズは俺の後ろに控えている。以前ローズにも席を勧めたのだが、「ありがとうございます。しかし、私はあくまでもピースレイン様の従者。ご主人様と同じテーブルに就く訳にはいきません」と言って断られてしまった。二人の時は甘えて膝の上に乗ったりするのにな。客人の前では俺を立てようとしてくれるのだろうが、もう少しフレンドリーでもいいのにと感じてしまう。そしてウルツは兵の訓練に行った。ちゃんと仕事はしてくれているので助かっている。あいつはあれで真面目なのだ。

「では、改めて。よく来たな。歓迎するよ」

「うん、ありがとう！ でね？ ピーちゃんにお願いがあるんだけど…」

上目遣いでリイちゃんが見てきた。リイちゃんはお願いするとき、相手に悪いと思うのか俯きがちになる。その結果上目遣いになってしまうのだが、……ぐっ、凄まじい破壊力だ。

「しばらく泊めてください、だろ？」

「ええ！？ 何で分かったの！？」

「そりゃ毎回毎回頼んだから分かるに決まってるだろ…」

「ははは！　ピースレイン殿は全てお見通しらしいな」

まあ、ここまで来てもらっというてすぐに帰すんじゃ申し訳ないかな。それに友人達と久しぶりに会ったんだ。もうしばらく居てほしい。食事なんかももう増やしてくれと言ってしまったし、帰ると言われたら逆に俺が困る。

「まあ、というわけで、好きなだけ泊まってけ」

「本当にありがとう！　もうピーちゃん大好きだよ！」

リイちゃんは俺の手を取り、胸の前で握りながら嬉しそうに笑った。そんなに嬉しがってくれるならこっちも嬉しい。その言葉も嬉しい、ので…その…、ローズさん殺気飛ばすのやめてください…。

「けっ、俺はこんなところ早く立ち去りたいぜ」

「おー、そうかそうか。奇遇だな、俺もお前なんか泊めたくないんだ。だから早く出ていけ」

「だが断る！！　俺がいなくなったら妹に何するか分かったもんじやないからなあ！！」

「お、お兄ちゃんっ…！？」

「ああ？　んだとこのクソガキ。俺がそんなに女癖悪く見えるかあ？」

「ああ見えるね！！　どうせそのローズさんや財務の姉ちゃんと

もやってんだろ!？」

「やってるわけねえだろ!! おい、ローズからも何か言ってる、何で顔赤らめてんの!？」

頬に手を当てながらもじもじしている。尻尾もくねくねと動いており、今にもいやんとか言いそうである。

「ほら見ろ!! その反応こそが確固たる証拠だろ!!」

「ほええ…、ピースレイン様は大人なんですねぇ…」

「アリア? それは勘違いだ。俺は誰にも手は出してない。オツケ」?

「ピーちゃん…。もうしちゃったんだね…?」

「ノー!! 激しくノー!!」

未経験だどこまで声を張り上げて主張するのも複雑だな…。もう23になるのに…。世間では婚約してから経験するのが一般的であり、未婚の男が未経験なのは珍しくないのだが、23で婚約していない方は珍しいのだ。まあ他の国の王は、関係なしに権力振りかざして使用人などに手を出しているかもしれないがな。にしても俺もそろそろ婚約者探さないといけないのかな…。

「はあ…、そっか…」

まずい。何故か分かんがリイちゃんが物凄い勢いで落ち込み始めた。あれか? 先越されたかと思ってんのか? まずはやってな

いって証明するところからだな。

「なあ、ローズ。そんなこと一度だっしてないよな？」

そう話を振ると顎に手をやり、少し考えるようなそぶりをしてから答えはじめた。

「……………はい、そうですね。そういったことはまだした事ないです。まだ」

おい、何故まだを強調する。リィちゃんの事嫌いかもしれないが抑えてくれよ…。

「ふむふむ、やはりピースレイン殿も殿方ということですか」

「何がふむふむ？ やってないって言ったよね？」

「やーい！ エロ魔王！！ 盛ってんじやねえよ！！！」

「うるせえんだよテメェは。やってないって言ってんだろ？ おーい、脳は正常に働いてますかー？」

「こ、この野郎…。」

「ん？ やんのかクソガキ」

「上等じゃねえか…。やってやるよ名前負け野郎！！！」

「名前…負け…っ！？ は、ははは…、ハハハハハハ！！ ……
…ブッコロス！！！」

「や、やめて下さい！ すいませんピースレイン様！ うちのバカ兄がいろいろと！！」

俺がクソガキをぶち殺そうと立ち上がる前にアリアが止めに入った。顔を赤くさせ必死になっている姿を見て、俺も頭が冷えていく。

「……………はあ。いや全く、何やってんだよ俺…。すまん、アリア」

大丈夫ですよ、とアリアはニツコリと笑って言ってくれた。

皆で楽しむためにここに来たのに、何やってんだ俺は…。クソガキと喧嘩するためじゃないんだからもう少し冷静に、おおらかにいこう。うん、そうしよう。だから俺は気にしてないのでローズは殺気を治めてくれると嬉しいかなっ。

にしてもアリアにはいらん気遣いさせたみたいだし、リイちゃんははまだ元気なさそう。俺が原因の一つではあるし、ここは一つ…

「そんな泣きそうな顔すんなよ、リゼ」

「…え？」

リイちゃんは、いやリゼは俺が何て言ったか分からないって顔で見つめて来る。以前言っていた呼称の話を気分を変えるつもりで言ってみた。さあ、どんな反応をするのか。

「ピーちゃん…？　今私の事、何て…？」

「ん？　リゼ、って。嫌だったか？」

「う、ううん！！　すごい嬉しいよ！！　でも、急にどうしたの？」

「いや、この歳でちゃん付けは…、少し恥ずかしいからさ。だから、これからはリゼって呼んでいいか？」

そう言うとりゼはどんどん笑顔になっていく。頬を僅かに赤くして。本当に嬉しそうにしてくれているが、呼び方ぐらいでそんなに喜んでくれるとは思わなかった。もうちょっと早く言えば良かったかな。

「えへへ…。リゼ…、リゼかぁ…。うん…、ありがとうね？」

「どういたしまして。って言っても呼び方変えたただけだし」

「ううん、すごく嬉しいよ？　ピーちゃんが思ってるよりもずっとね」

「そうか？」

「そうだよ。そしてさ、私もピーちゃんじゃなくて…、その…、レイ君、って呼んでいい…？」

「…ああ、もちろんさ」

またリゼが笑みを深くする。俺が思ってるよりもずっと、か…。

多分そうなんだろう。俺が思ってるよりも、こいつにとってリゼって呼ぶことには大きな意味があるのかもしれない。相手の呼び方には互いの関係が大きく関わってくる。今までは幼なじみっていう関係だったけど、今はどんな関係なんだろうか。幼なじみっていうのは変わっていないと思う。でもなんか違う気もする。こう思うのは俺だけかもしれないけど、今までの子供の頃の延長のような関係から、男と女っていうのをちゃんと意識した関係へ発展したと思う。だからどうこうってわけじゃないが、きっと何か、どこか以前と違うところが出てくるだろうな。

「ふむ。ではピースレイン殿、私のこともミーシャとお呼び頂きたいですな」

「ん、分かった。じゃあ俺も適当に呼んでくれ。あ、アリアもな」

「い、いえ!! それはいけません!! ピースレイン様は魔王と呼ばれておりますが一国の王様です。リイナーゼ様は幼なじみというご関係であるからこそで、私達は恐れ多くて呼べませんよ!!」

そんなもんなんだろうか？ 幼なじみだからって、王と何の気負いもなく話せるもんじゃないと俺は思うけどな。こいつはあまりそこら辺を考えてない。断言できます。

「んー…。そんなの気にしなくてもいいぞ？」

「いえ、でもお…」

「ピースレイン殿。アリアは貴殿の体面を気遣ってこう言っているのですぞ？ 城内では無理でしょう」

「なるほど。…ならこの場じゃなければ大丈夫、ってことだな？」

「はぁ、まぁそういうことになりますな。…何を考えておいでで？」

ふむふむと、一人頷いているとミーシャが訝しそうにこちらを見
てくる。リゼやアリアも同様で、可愛らしく首を傾げ不思議そうな
表情だ。ついに血迷ったか、みたいな顔をしているクソガキは後で
しめるとして、そろそろ言うとするか。

「いや城内じゃなきゃいいならさ…、皆、今から城下街に遊びに行
かないか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1636v/>

幼なじみは勇者様、対する俺は魔王様

2011年10月7日23時46分発行